

## 「韓国カトリック大学と交流協定覚書を調印しました。」

天使大学 学長 武藏 学

天使大学の国際性といえば、卒業生の海外での活躍、助産研究科のアフリカ英語圏「母子保健」研修員の受け入れと国際助産学実習のマダガスカルなどで実績はあるものの、これまで具体的に国際協定を結んではいませんでした。どこか良い大学があればという気持ちを抱いていた中、たまたま2015年秋に参加した他大学の式典で韓国カトリック大学 (Catholic University of Korea) の総長と国際交流部長のお二人にお会いしてご挨拶し、思いを伝えました。その後、聖マリア学院大学の井出学長が間に入ってください、先方が11月に来札された時に提携の覚書を結ぶ運びとなりました。内容は「教員の交換、学生の交換、共通のカンファレンス、共通の研究、共通の文化交流」の5項目で、今後進めていくことを約束し、詳細はすべてこれから検討していきます。国際交流の窓口やスタッフを配置し、こちらもノウハウを勉強しながら、交流の輪を広げていきたいと思えます。

その第一歩として、12月に近藤理事長、白石総務課長と私の3名で韓国を訪問し、韓国カトリック大学を視察してきました。18,000名の学生が在籍する極めて規模の大きな大学で、医療系キャンパスはソウル市街の中心地にあり、付属病院も高級ホテルのように豪華な設備が整っていました。また、図書館は1フロアに650席の閲覧室を備え、学生たちが試験を控えてピリピリと張り詰めた雰囲気勉強していました。

そのようにスケールの違う大学との具体的交流についてですが、個人的には、看護分野では「ホスピス」が考えられます。先方にはWHOの協力施設に指名されているホスピスの研究所があり、本学の大学院もホスピスケアに力を入れているため、それを手始めにできそうです。また、栄養分野の先生とは短時間の会話でしたが、テーマとして「減塩」が挙がりました。日本人は依然、塩分過剰摂取で健康日本21の目標には遠く及ばず、韓国の方々も塩分摂取が多めということで、共通する課題になっています。それから日本食とメンタルヘルスの関係では、現在、米と味噌が良いということがわかってきていて、韓国の方も米と味噌を召しあがるので、そのあたりも共同で研究できそうだと個人的には思いました。今後、各学科・研究科で議論を進めていただき、2017年度のうちに具体化したいと考えています。

異文化体験も大きな学びになります。私は今回が初めてのソウル訪問でしたが、広い幹線道路が縦横に走り、車も非常に多く、高層ビルが林立する街から、アメリカナイズされているという印象を受けました。アメリカまで行くのは大変だという学生も、韓国なら近くて行きやすいでしょう。自分の居場所を少し離れ、外から見ることによって自分たちの生活を相対化することは、とても貴重で有意義な経験になるはずです。お隣の国、同じカトリックの大学ということで、天使大学にとっての国際交流のスタートとしては最高の相手と協定を結ぶことになり、本当によかったと思えます。



韓国カトリック大学校の Fr.Johan Yeongsik Pakh 総長と本学武蔵学長

## ヘルスケア実践開発プロジェクト –2016年度の活動から– 「地域の独居老人宅への訪問をとおして」

栄養学科 教授 山口 敦子

プロジェクトは本学が有する看護・栄養・助産についての総合的な資源を活かして、地域住民が健康で快適な日常生活を送るためのサポートを行う地域貢献のために2015年度から活動をしています。

活動は、主として、高齢者や子育て支援を行い、具体的には、「ライフステージ支援事業」として、1. 札幌市委託事業：札幌市東区「すこやか倶楽部」での介護予防支援、2. 札幌市東区連絡協議会との連携で「ふれあい体験」（老年看護学の授業）、3. 札幌市東区北光町内会との連携で「独居老人宅の訪問」（環境食事論の授業）、4. 認知症サポーター養成講座（研修会）、「子育て支援事業」としては、「天使大学子育てサロン」を実施しました。

事業は学生が主体になって企画し、地域住民へのサポートを行いました。授業をとおして実施した事業もあります。住民の皆さまから喜んでいただき、学生達もやりがいを感じているようです。その一例をご紹介します。

2016年12月上旬に北光町内会の方の協力を得て、環境食事論を受講した栄養学科4年次の学生達が、手作りのクリスマスケーキにカードを添えて地域の独居老人宅を訪問

しました。事前に町内会の方から学生が伺うことを連絡していただいたのですが、学生が来るということで、いつもよりおしゃれをして待っていただきました。喜んでくださる様子を拝見し、学生達も感動したようです。後日「ケーキおいしかったです。ありがとう。」と住民の方から大学にお礼が届きました。学生達は感動したようです。

今後も学生が主体となって地域住民の皆さまをサポートできるように、活動の基盤を作っていきたいと考えています。



町内会の方と訪問前に

## 天使健康栄養クリニックについて

栄養学科 准教授 鈴木 純子

天使健康栄養クリニックは、地域住民を対象にメタボリックシンドローム予防を目的とし2006年から毎年開設されています。地域貢献、臨床栄養学的研究および健康行動変容を通じた大学院生及び学部生の実践的教育に活用されており、第三者評価においても高く評価されました。受講者は重篤な病気の無い40歳以上の肥満の気になる方を一般公募し、2006年から2016年までの参加者はのべ497名となっています。

クリニックのプログラムは、検査・測定に限定したコースと個別指導のコースに分かれ、個別指導コースは3か月間、2週に1度の指導を受けることができます。



体組成測定

指導を受ける前後に検査・測定コースの方と同時に様々な測定を受けます。個別指導コースの方は行動変容段階に対応した個別指導・支援を



食事についてアドバイスを受ける参加者

行ったため、検査・測定コースと比較して健康意識の改善が顕著に進んだことが確認されています。これに伴い、体重や腹囲、体脂肪率などメタボリックシンドロームの指標も改善しています。尚、検査限定コースの方にも、研究終了後に個別指導を受ける機会を提供しています。

これらの成果は数多くの学会等での報告や学位論文に活用されている他、クリニックのスキルを活用した他大学との共同研究、全国の管理栄養士養成校との意見交換など、学術的な活動も広がっています。今後もクリニックのプログラムを進化させつつ、地域貢献と教育・研究への活用に生かすべく、スタッフ一同取り組んでいきたいと考えています。

## 「第32回カトリック医療関連学生セミナー」が本学で開催されました。

看護学科 教授 佐藤 昇子



2016年のカトリック医療関連学生セミナーは天使大学が会場となり、8月6日・7日の2日間にわたって開催されました。本学からは、過去に京都や岡山でのセミナーにも参加した看護学科

の学生たちが、実行委員も兼ねて積極的に参加してくれました。今回は「ともに成長する親と子」をテーマに4名の講師陣をお迎えし「児童養護施設で暮らす子どもたち ～さまざまな親と子の形～」 「子どもの笑顔を守るために ～子ども虐待の防止に向けて」 「親と子どものための性教育～性教育の目的とは何か～」 「いのちの始めと母と子のきずな」という4つの講演が展開されました。子どもの笑顔を守る親のかたちも人権、性教育も人権です。幼い頃からのように人を大切にしていけるべきか、また、どのようにお互いの違いや人格を認め合っていくべきか、そして、命を育てていくことがどれほど尊く大切なことか。先生方はそういった根源的なところを、概念的ではなくきわめて具体的に、カトリックの立場からお話しくださり、すばらしい講演でした。

このセミナーの特徴は、講演ごとに質疑応答があり、2つの講演が終わるとさらにグループディスカッションと発表の時間を設けていることです。8つのグループには、桜町病院長の石島名誉院長、聖マリア学院大学の井出学長をは

じめ、そうそうたる先生方やベテラン看護師さんが参加されていて、学生は必ずそのどこかに加わり、一緒にディスカッションができるのです。日頃は同年代と議論している事の多い学生にとり、大変貴重な機会であり、「大人の方々と真剣に考えることができ、とても勉強になりました」「私たちの意見も真剣に聞いてくださり、一緒にディスカッションができて、本当によかったです」と感激していました。自分を一人前の大人として扱ってもらえたという思い、これは彼女たちが今後看護師として育つうえでも、とても重要なことだと私も気づかされました。サッポロビール園での懇親会でも、学生たちは学長クラスの大人の間で和気あいあいと語り合い、うれしそうな顔でひとときを楽しんでおりました。

セミナーの実行委員として事前の打ち合わせや書類の発送、参加者の案内役なども担い、1つのイベントを作り上げる方法を体験したことも、学生たちには成長する機会になったことでしょう。一緒に取り組むことで仲間や教員との連帯感が生まれ、学生も自分に自信がついてきます。倫理観を養っていくのはなかなか難しいのですが、性の倫理や人権とは具体的にはこういうことだと、学んだこと、自分たちが体験したことを、クラスのみんなにも伝えてほしいと願っています。また、このような講演での学びと普段の授業をどうつなげていけばよいのか、それが私たち教員に与えられた課題です。本学の学生は大学からの支援で受講できますので、特に人を大切にすることに興味のある学生は、今後もっと多く参加してほしいと願っています。



学生玄関前の看板



学生玄関内の展示物

## タンザニア・スタディツアーに参加して

大学院助産研究科 教授 津田 万寿美

皆さんは、タンザニアという国をご存知ですか。セレンゲティ国立公園をはじめとした野生動物の王国、アフリカ大陸の最高峰キリマンジャロがある国を思いうかべ



現地のお店

た方は、かなりアフリカに関心を持っておられる方でしょう。昨年9月、私は、20年以上小さな支援を続けてきた日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）が主催するタンザニア・スタディツアーに参加してきました。

東アフリカに位置するタンザニア連合共和国は、国土は日本の約2.5倍、人口約5,347万人（国連人口局2015）、農業（綿花、コーヒー、紅茶、カシューナッツなど）、観光、鉱業（金、天然ガス）を主要産業とする独立後50数年になる経済成長が著しい国です。しかし、高層ビルが建つ都市部と水や電気へのアクセスも大変な農村部との生活格差はまだ大きい実情です。

今回の訪問地域は、タンザニアの中でも生活や健康指標が下位にとどまっているタボラ州でした。日本からのワーカー（医師）が派遣されている聖アンナ・ミッション病院を中心に、州立キテテ病院やSt. フィリポヘルスセンター、イゴコ診療所を訪ねました。

聖アンナ・ミッション病院は、カトリックタボラ大司教区保健事務所が管轄する施設で、緑豊かな広い敷地に、一般病棟のほか救急病棟、成人病棟、周産期病棟、小児病棟、HIV感染外来などの建物が渡り廊下でつながる構造でつくられていました。新病棟の完成もあり、規模拡大とともに医療設備の充実をはかっていました。しかし、周産期病棟では、どのベッドも1台を2人の妊産婦でシェアしていましたし、外来では、1人の助産師が乳幼児健診と予防接種業務を並行して受け持っており、設備や人材不足の深刻さがうかがわれました。

患者側には病院を受診することの困難さがありました。タンザニアのなかでも人口当たりの医療施設数が低いタボラ州では病院まで遠距離であることが多く、未舗装など道路状況の悪さや公共交通機関の未整備から、経済状



聖アンナ・ミッション病院

態によって車、オートバイや自転車への同乗、徒歩と受診は容易ではありません。さらに、保険加入者は経済的に恵まれているごく一部の者に限られ、多くの人々

は病状によってではなく、治療費が払えるか否かで受診や治療・入院の是非が決まってしまう。まだ治療半ばであっても支払った額までの診察や投薬で退院になります。また、入院となれば、患者の食事や身の回りの世話のために家族が付き添うことになり、家では働き手を2人失うことになります。そのような状況のなかでも、母子保健サービスの多くは、国際的な支援によって行われていました。病院の妊婦健診や乳幼児健診には、多くの妊婦や母児が来院していました。妊婦に処方される鉄剤や駆虫剤、乳幼児への予防接種は無料で行われていました。5歳未満児死亡率（出生時から満5歳に達する日までに死亡する確率。出生1,000人当たりの死亡数）は、1990年165人から2015年49人（ユニセフ2015）と急速な改善がみられています。今後も、周産期管理の充実やマラリア対策などが期待されています。※日本の5歳未満児死亡率は3人（ユニセフ2015）



乳幼児健診体重測定

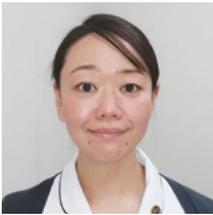
日本も、かつては貧しく、多くの生命を奪った結核の蔓延、上下水道の未整備など衛生環境や母子保健に多くの課題を抱え、大きな国際的な支援を受けた時期がありました。改めて、困難な状況にある人々の健康と幸せのために、自分にできる支援について考える機会になりました。

ツアーで出会ったフレンドリーで明るい人々の顔が浮かんできます。教会のミサで聞いた素晴らしい聖歌隊の歌声、ツアーメンバーで連日練習し、披露したスワヒリ語で歌った日本の歌のなかで「カエルの歌」の輪唱が一番受けた愉快的意外さなどなど、楽しい思い出が尽きないスタディツアーでした。日本から1万キロ以上離れた遠い国ですが、今は身近に感じられる国のひとつです。



助産師から妊婦健診カルテの説明

## 活躍する修了生・卒業生



## がん看護専門看護師の仕事

がん研究会有明病院 緩和ケアセンターがん相談支援部 がん看護専門看護師  
看護学科2006年3月卒業、大学院修士課程看護学専攻ホスピス・緩和ケア看護学2013年3月修了  
大友 陽子

## Q1 現在の勤務先を志望された理由を教えてください。

現在の勤務先は大学院生時代の実習先でした。そこで、様々な専門・認定看護師が在籍し活躍する姿を見ました。これまでは所属するのは1人の専門・認定看護師だけという医療機関が多かった中、複数の専門看護師、認定看護師が在籍する医療機関が増えていきます。がん研有明病院でなら、各専門・認定看護師と協働しながら役割開発をすることができると感じ、志望しました。

## Q2 1日のお仕事の基本的な流れを簡単に教えてください。

【時刻】	【行うこと】
8:25	出勤、情報収集、カンファレンス
9:30	相談業務 ・ 電話対応：院外・院内のがんに関する相談全般 ・ がん看護相談：予約の対面相談、直接来室相談者の対応 ・ 外来から依頼があった場合にインフォームド・コンセントに同席、面談を行う
12:30	休憩
13:30	相談業務
17:00	退勤

## Q3 お仕事の「大変さ」と「やりがい」について教えてください。

がんの専門病院なので、院内・院外の相談者の期待は大きいです。日々、知識・技術を駆使しながら相談対応をする大変さがありますが、病院内の各部門と協力しながら実践ができるやりがいがあります。

## Q4 天使大学での学びや生活を振り返って、特に印象に残っていること、その中で自分が成長したと思うことを教えてください。

天使大学では、人との接し方、相手の気持ちを考える基本を教えてくださいました。特に実習の中で深めることができたのが印象的です。

## Q5 これからの目標について教えてください。

がん看護専門看護師になってまだ日が浅いので、自身のスキルアップをしながら、がんになった人と周りで支える人たちへの看護の質をより向上できるように努力したいです。

## Q6 最後に一言。

大学での学びはその時にしかできない貴重なものです。様々なことに疑問を持ち、学びを深めてください。また、かけがえのない友人たちと過ごす時間も大切に、そこから学んだ人間関係の大切さや人としてのあり方を看護に生かしてください。



## 会社の経営に関わり、今思う事

滝本食品株式会社 常務取締役 管理栄養士、フードコーディネーター、料理教室 salon de oeufs 主催  
栄養学科 2004年3月卒業、エコー社東京 フランスイタリア料理マスターカレッジ卒業  
中居 香織

## Q1 現在の勤務先を志望された理由を教えてください。

滝本食品株式会社は祖父の代から続く67年目の会社で現在は父が社長です。市内6か所の食堂運営をしています。ヘルシーメニュー開発など管理栄養士として父の役に立てることがあればという気持ちで9年前に入社しました。

## Q2 どのような業務をおこなっているのか教えてください。

札幌市役所地下食堂のヘルシーメニュー「ずずらん定食」の監修と、地産地消や道内連携のフェア企画、調整、広報等を行っています。各営業所に料理長とホールリーダーがおりますので、毎日の営業はそれぞれにお任せしています。現状の問題点を整理し、改善に向かって何をしていくかなどの今後の方向性についての打ち合わせ、営業所と役員のパイプ役が主な業務です。

## Q3 お仕事の「大変さ」と「やりがい」について教えてください。

お客様のニーズの多様化や求める品質の高さはどんどん上がり、急スピードで変化していると実感しています。求めている情報を得られるようにアンテナを張りつつ、自社の現状の強みや弱点を把握して何ができるのかという可能性も常に意識しています。より良くなるために考え、企画して行動、反省する毎日です。やりたいようにさせていただいているので大変とは思いませんが、常に考える仕事ですので意識して心から休める時間も作るようにしています。そして「やりがい」をもって仕事をしている社員を見たときに一番やりがいを感じます。会社に関わる全員のモチベーションを向上できる工

夫が必要で重要だと思います。お店の一番の売りは「働く人」で、やる気があって一生懸命な姿こそお客様の心を掴み、喜んで頂けると思っています。それと、思いやりやおもてなしの心が料理を美味しくします。「笑顔と優しい挨拶」はとても重要です。当たり前のことですが、日々の業務に追われてしまうと忘れがちなことでもあるので、定期的に社員の皆さんにも意識していただいております。

## Q4 天使大学での学びや生活を振り返って、特に印象に残っていること、その中で自分が成長したと思うことを教えてください。

料理研究家になる目標があり、機会があれば料理コンテストに参加していました。レシピ開発するにあたり、あの頃は自分のこだわりが優先でしたが、今は食べる相手の好み、お客さまの事情が最優先です。何が求められているのかを重視してから作成しています。随分大人になりました(笑)。

## Q5 これからの目標について教えてください。

父が安心して会社を任せられるような器になることと同時に、管理栄養士である私らしい会社の未来を構築して実現したいです。

## Q6 最後に一言。

管理栄養士という資格を持っていることで、多くの方に安心と信頼を持っていただけますので、取得できて本当によかったと思っています。管理栄養士は今まで以上に食の仕事で活躍できる幅が広がっていくと思います。頼まれごととは試されごとだと期待されたことに感謝し、今後もチャレンジを続けていきます。

## 学生の活躍

### 学生がパネリストとして参加しました。

2016年5月21日(土)、さっぽろテレビ塔ホールで「キタセカーキタからセカイへ」というイベントが開催され、学生4人によるクロストーク「私達が北海道から世界へ飛び出した理由」のパネリストとして、看護学科3年次 布上朝香さんが登壇しました。



布上さんは同年3月に参加したフィリピンでのスタディツアーについて、自分の思いも交えて語りました。反対する親を説得して渡航したこと、フィリピンの子どもの笑顔に癒されたこと、その笑顔から「幸せとは何か」について深く考えさせられたこと。これから海外を目指す学生の後押しとなるようなその言葉に、会場に集まった学生たちは真剣なまなざしで聞き入っていました。

### 学生が卒業生と一緒にイベントに参加しました。



2016年8月21日(日)に札幌市内で行われたアンチエイジングと医療・介護のイベント「コムフェス2016」で、栄養学科3年次生の坂本星美さんと栄養学科卒業生の福島佳恵さん(2011年3月卒)、金川綾華さん(2016年3月卒)が料理

教室のデモンストレーションを行い、健康メニューを紹介しました。参加者からは「おいしい!」「作ってみたい」などの反応が寄せられました。

### 看護学科卒業生による講演会が行われました。(アフリカ・ガーナの医療事情)

2016年7月12日(火)に看護学科卒業生の柴田未来さん(2006年3月卒)による講演が行われました。柴田さんは2013年から2年間、青年海外協力隊の一員としてアフリカのガーナに助産師として派遣されました。



現地では助産師も医者もない診療所でガーナ人スタッフとともに働き、「看護師への指導・教育」や「妊婦健診や乳幼児健診」、「村の学校での性教育」などの活動を行ったことがスライドを使って紹介されました。そして、柴田さんが活動をとおして学んだ「本当の豊かさとは何か」について、学生たちにメッセージが伝えられました。

### 看護学科卒業生による座談会が行われました。(インドの医療事情)

2016年8月9日(火)に看護学科卒業生の村井沙織さん(2009年3月卒)による講演が行われました。村井さんは現在、日本企業が経営するインド初の総合病院「サクラ・ワールド・ホスピタル」(SAKRA WORLD HOSPITAL)で看護師教育に携わっています。



村井さんからインドの保健医療の現状や課題、村井さん自身の活動内容が紹介され、学生たちは熱心に聞き入っていました。

### 平成28年度札幌市お弁当プロジェクト「お弁当レシピコンテスト」(一般市民の部)で、学生が特別賞を受賞しました。

平成28年度札幌市お弁当プロジェクト「お弁当レシピコンテスト」(一般市民の部)で、本学栄養学科1年次生の加藤由梨花さんが特別賞(北海道漁業協同組合連合会会長賞)を、1年次生の佐藤知佳さんが特別賞(株式会社北海道日本ハムファイターズ賞)をそれぞれ受賞しました。



一般市民の部は、応募規定の中に北海道産食材をできるだけ使うことなどの項目があり、お弁当を開くだけで季節を感じることができる工夫を凝らしたレシピを考案しました。受賞したレシピは札幌市のホームページに掲載されています。

### 学生が学会ボランティアを行いました。



2016年10月8日(土)、9日(日)、札幌コンベンションセンターで行われた「第40回日本死の臨床研究会年次大会」にボランティアとして看護学科1、2、4年次生約20名が参加しました。受付やクローク、会場係などを担当し、合間を縫って講演等も聞きました。学生たちからは「全国から3,500名以上の方が参加し、その数の多さに驚いた」「死の臨床に関する多様な見方を学ぶことができ、有意義だった」などの感想が語られました。笑顔で対応する学生たちの姿は、参加者からとても好評でした。

### デボラ・ウイット・シャーマン特任教授による特別講義が行われました

2016年7月7日(木)、大学院看護栄養学研究所看護学専攻ホスピス緩和ケアコース特任教授のデボラ・ウイット・シャーマン教授(フロリダ国際大学教授)による学部生対象の「アメリカにおける緩和ケア」の特別講義が初めて行われました。看護学科1年次生と栄養学科4年次生が参加し、積極的ケアと緩和ケアの違い、全人的ケアである緩和ケアにおける8つの領域について学びました。



### 本学学生が剣道大会で入賞しました。

2016年10月30日(日)、北海道大学第一体育館で行われた「第33回北海道女子学生剣道新人戦大会」に看護学科4年次生の村上わかなさんと看護学科2年次生の山下愛結さんが参加し、団体戦第3位となりました。



### 学生が東京都で行われたイベントに出店しました。

2016年11月5日(土)、6日(日)に東京丸の内仲通り・行幸通りで行われる農林水産省主催「食と農林漁業の祭典 ジャパンハーヴェスト2016」に栄養学科3年次の坂本星美さんと、2年次の秋山菜々子さん、大城愛梨さん、大竹春香さんが参加しました。

## 公開講座

### 2016年度 天使大学・北海道薬科大学 連携公開講座報告



2016年8月18日(木)～9月15日(木)の5回に渡り、「いのちみつめて」のテーマで医療、薬、看護の分野から、生活に役立つ情報をわかりやすく解説しました。

回	日程	講演題目・講師
①	8月18日(木)	キリスト教の愛とは何か -カリタスとしての愛- 天使大学教養教育科 准教授 小原 琢
②	8月25日(木)	不眠とうつ予防 -質の良い眠りで気持ちスッキリ- 天使大学看護学科 教授 荒井 春生
③	9月1日(木)	認知症にマケナイ食と栄養 天使大学栄養学科 教授 佐藤 香苗
④	9月8日(木)	くすりの形と生体内運命、そしてドラッグデリバリーシステム 北海道薬科大学 教授 丁野 純男
⑤	9月15日(木)	認知症の理解と予防、治療、対応について(北海道薬科大学で行われました。) 北海道薬科大学 教授 三浦 淳

学生の活躍



「丸の内農園」というテーマで行われ、大学生自ら収穫した農産物や民間企業との連携等により開発した加工品を販売するWaku Waku Marche「農林漁業学園」のエリアで、4人が商品開発した奥尻島のウニを使った「ウニのフランチ」や奥尻ワインを使った「ワインフレンチトースト」、「ワインジャムクッキー」、そして、栗山町の玉ねぎ、むかわ町のだるまいもを販売し、好評のうちに終了しました。

コープさっぽろ星置店で栄養教育を行いました。

栄養学科1~3年次生5名が、2016年11月28日(月)にコープさっぽろ星置店で健康企画「からだに美味しいごはん」としてシニアの方を対象に栄養教育を行いました。クイズを取り入れた工夫を凝らした栄養教育で、参加者から大好評でした。参加者からの要望で、栄養教育終了後には参加者と一緒にお弁当も食べました。



地域連動



広報さっぽろ(東区版)に掲載されました。

「広報さっぽろ(東区版)」2016年7月号に、本学栄養学科4年次生の戸ノ崎さんと山石さんが考案したレシピが掲載されました。

東区児童会館まつりに参加しました。

2016年9月4日(日)にアリオ札幌(札幌市東区)で行われた「2016東区児童会館まつり」に、本学栄養学科が「食べ物はどこからきたの?」というテーマでブースを出展し、栄養学科3年次生11名が参加しました。「食べ物はどの部分にできるのか?」「花の写真から何の食べ物を当てるクイズ」など工夫を凝らした内容で、子どもたちは楽しく学んでいました。



栄養改善教室を行いました。

2016年9月23日(金)、29日(木)の両日、栄養学科3年次生6名、4年次生6名が「すこやか倶楽部」の方を対象に栄養改善教室を行いました。「すこやか倶楽部」は、概ね65歳以上の要介護認定を受けていない方を対象とした、心と身体の健康づくりを目的とした札幌市の委託事業です。



ひがしく健康・スポーツまつりに参加しました。

2016年10月23日(土)につどむで行われた「ひがしく健康・スポーツまつり2016」(東区連合町内会連絡協議会、東区役所、さっぽろ健康スポーツ財団主催)に本学学生が参加しました。

産学連携

イオン・ホクレンとのコラボ弁当を発売しました。

看護栄養学部栄養学科監修によるイオン北海道大収穫祭(協賛:ホクレン農業共同組合連合会)の特製弁当「天使の大地からの贈り物 “天使のまごころ弁当”」が、2016年9月22日(木)から4日間限定で全道のイオングループ各店(一部店舗を除く)で販売されました。



学生が看護雑誌の取材協力しました。

看護学科4年次生4名(遠藤さん、佐藤さん、長尾さん、林さん)が、雑誌『Nursing Canvas 2016年10月号』(学研メディカル秀潤社)に掲載

されました。「学生の視点 指導者の目線 日常生活動作の介助」という特集記事の中で、撮影に協力しました。

食べる・たいせつ フェスティバルに参加しました。

2016年8月27日(土)にスポーツ交流施設「つどむ」で開催された「食べる・たいせつ フェスティバル2016」には、天使大学とコープさっぽろ生活事業部とコラボした体験ブース「コープ給食工場」も出展しました。子どもたちが、お弁当の具材を量る、ベルトコンベアーを使って盛り付けるというお弁当づくりの作業体験するもので、栄養学科の学生がサポートや、お弁当の具材に関する栄養教育を行いました。



リレーコラム第十回  
本学教職員による

頑張る教職課程の学生  
— 栄養教諭を目指して奮闘中 —

教養教育科 准教授 新井 英志

天使大学で教職課程担当となり3年目が過ぎようとしています。近年の教職課程の現状と栄養教諭を目指す学生達の奮闘ぶりを紹介させていただきます。

本学の教職課程は、看護栄養学部栄養学科の学生を対象に、栄養教諭一種免許状の取得を目的として2005年4月より設置されています。

近年、教員養成を取り巻く環境は厳しく、教師としての使命感や実践的指導力の高い学生を育成・輩出することが大学に求められています。そのため、本学では、栄養学科の高い専門教育とともに、教職課程においては、教師としての資質・能力を育むアクティブラーニング中心の講義・演習を多く実施しています。同時に、ボランティア活動を推奨するとともに、1年次の北大農場における農作物収穫・田植・稲刈り体験、2年次の学校インターンシップ体験など、

現場での学びを通して栄養教諭としての自覚や意識を培う教育を実践しています。

また、3年次後半からの外部講師による2回のガイダンス、教員等による3回のゼミなどの教員採用試験対策や就職支援も充実しています。例年、4年次生は15名前後ですが、小人数ならではのグループワークやきめ細やかな指導が、学生達の人間性や社会人としての基礎力を高め、教師としての力量向上につながっていると考えています。

教職課程の学生は、2016年度の北海道・札幌市公立学校教員採用候補者選考で栄養教諭として7名(現役4名、過年度卒3名、合格者26名中)が合格するとともに、札幌市の栄養士職員にも5名(現役、教職課程以外1名も加え本学計6名、合格者8名中)が合格しました。これは教職課程の学生達の学ぶ意欲の高さや行動力、チームワークの良さ、さらには、それを支える栄養学科、教職担当教員および学務課担当職員の熱意あふれる指導など、本学の教育力が遺憾なく発揮された結果と分析しています。学外はじめ関係の皆様にも厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも教職課程へのご支援をよろしくお願い申し上げます。

## 「ホームカミングデー2016」で、建学の原点を振り返るお話をしました。

マリアの宣教者フランシスコ修道会 北広島修道院 シスター 沢 禮子



2016年6月11日(土)、天使大学初のホームカミングデーにおいて、「天使大学創立の原点を振り返って」というテーマで講演をしました。天使大学のバックグラウンドは、1877年に創立された「マリアの宣教者フランシスコ修道会」で、天使大学の建学の精神の「愛をとおして真理へ」はキリストの生き方、キリストの精神です。創立者のマリー・ド・ラ・パシオンはそれを自分たちの生き方として世界中に会員を派遣し、北海道には1908年夏、フランス人、イタリア人など7名の若いシスターが派遣されました。慣れない生活の中で準備を進め、伝染病や貧困に苦しむ人々の救済活動、慈善医療を行う診療所をスタートさせたのが1911年。これが天使病院の始まりです。天使大学の天使という名は「天使の聖母 聖マリア」のご保護のもとに創立されました。そのため学内の至るところにマリア像があるのです。

7名のシスターは人間の尊厳を大切に、「愛をとおして真理へ」をモットーに徹底した看護、病気のケアではなく「病気を持ったその人」の看護を貫きました。1924年には病院内に看護婦の養成所も開設しました。そして混乱の時代を乗り越え、終戦になるとGHQの総監督ミス・ウィルソン達が視察に来ました。ミス・ウィルソンは天使病院を拠点にアメリカ式看護法の指導にあたり、シスターマリア・ルイザ川原ユキエ医師に、高度な看護教育を行ってレベルアップに努めるよう指示しました。そこで直ちに準備を進め、文部省・厚生省の認可を得て、1947年に設立されたの



札幌に来た7人の創設者のシスター達

が、天使女子厚生専門学校です。北海道大学の教授たちが講師として御支援くださり、基礎医学から一般教養まで、医学部生に教えるような厳しい教育が始まりました。その後、アメリカ人のシスター・マリア・エヴァンジェリナ(元天使病院看護部長)が全面的な看護改革に着手し、付き添いなしの完全看護、完全給食、オートクレープでの消毒など、北海道で初めて近代的な看護を導入しました。看護実習も病院で徹底的に行ったので、1期生は卒業してすぐに主任看護婦になり、私たち4期生が入学したときはもう婦長クラスでした。頭に被るベールがキャップに変わり、戴帽式が始まったのもその頃です。ナイチンゲールの誓詞を唱え、看護の道を進むことを公けに宣誓するこの行事は、今も受け継がれています。



Sr. 川原ユキエ先生と  
Sr. 中村タキ先生達



看護実習室

1949年によりやく病院から独立した校舎が完成し、天使女子栄養学院も設置されます。そして川原ユキエ校長が再び大変な苦勞をして文部省に申請を行い、1950年、日本初の看護短期大学として天使厚生短期大学厚生科が、さらに翌年に栄養科が開設されました。全寮制で、人間教育や宗教教育、生活教育も織り込まれていました。それから社会の変遷、医療の進歩など時代に合わせてカリキュラムの改善、授業内容の充実を遂げてきましたが、あくまでも「愛をとおして真理へ」という理念は変わっていません。キリストの精神によって、個人の尊重、奉仕する、お互いに支え合うという愛の実践、また、修養会などを通して内省し、看護者又、管理栄養士として、自己形成する教育が今も継承されているのです。



調理実習室

あなたの声をお聞かせください

天使大学報「天使」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりを目指しています。ご意見、ご感想、取り上げてほしい話題等ございましたら、下記あて先までお寄せください。

あて先 〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30 天使大学広報委員会 tel 011-741-1051 fax 011-741-1077



天使大学

看護栄養学部/看護学科・栄養学科  
大学院/看護栄養学研究科  
助産研究科(専門職学位課程)

第22号 2017年3月31日 発行 天使大学広報委員会

<http://www.tenshi.ac.jp>